

『吐き出す』

暮村佐人

9,660 文字

あらすじ

性格の不一致が原因で別れ、同棲を解消することになったアラサーカップルの結と聖人。引っ越す前に部屋を掃除していると、自然とこれまでを振り返って本音を言い合う流れになる。掃除したエアコンから黒い汚れが吐き出されるように、ふたりの間の空気の淀みもなくなり、やり直すことを決意する。

セミダブルのベッドを持ち上げると、足元の床がきしんだ。ヒヤッとして見下ろすと、ベッドを支える4本の脚の辺りの床が少し傷ついていることに気付く。あれ、こんな傷いつできたんだっけ？ これって経年劣化に入るのかな。もし、クリーニング代を請求されたらいくらくらいなんだろう……。

「おいっ、はやくそっちに動かして。俺のほうが無理な体勢してんだから」

結がひとり頭の中で、敷金とクリーニング費用を足し算引き算していると、ベッドの縁を持って首筋を赤くした聖人がそう言った。結はわかったからと言うと、ゆっくりと左後ろへ歩みを進め、ベッドをその場に置く。

「あー、ここにも……」

落胆した様子の結に、肩を上下させながら聖人が尋ねる。

「どうかした？」

「聖人、私がここに来る前、ベッドの下って掃除したことある？」

「んー、あったっけなあ……」 十秒程度考えた後、聖人は顔をあげる。「あ、そういや、壁との隙間に落ちたもんを拾おうとして動かしたことはあったな」

「なにが落ちたの？」

「保険証とか」

「なんで保険証がベッドの下に落ちるの……急に病気になったらどうするつもり」

聖人は少し考えた後、思いついた顔を見せる。

「んー、そしたら結に行ってもらうかな。仮病演じてもらって、クスリもらって来てもらって」

「私が？ 保険証、ベッドの下にあるせいで？」

「保険証ないんだし仕方ないじゃん」

「じゃあ、前立腺の炎症だったらどうする？ 私、前立腺ないけど？」

「それは後輩に行かせるかな、会社の。よく風俗行ってるやついるから」

まあでも俺、風邪とかもう何年も引いてないけどね。結が言葉を失っていると、ケロツとした顔の聖人が、さらに思い出したように言う。

「あ、でも最近金ねえな〜って思ったら、諭吉がその隙間に4人くらいいたこともあったな」

「一ヶ月の食費じゃん、それ」と、結は絶句した。「で、そのとき、どうやってベッド移動させた？」

「えっ、移動？」

聖人がキョトンとして聞き返す。

「そう、ベッドの。怒らないから教えて」

「怒らないから教えてって、お母さんが子供に怒るときに言うやつじゃん」と、聖人は怪訝な表情になった。

「私は聖人のお母さんでも、お姉さんでもないよ」と、結は低いトーンで静かに言った。落ち着いた、それでいて「妙な圧迫感がある」と聖人が時折指摘する、言い方でだ。

「まず、ベッドの端っこを引っ張って30センチくらい隙間あけるでしょ。そしたら、自分の中に入って、でこうやって脚で思いっきりベッドを押し！」

両手をぐいっと押し出しながら言う聖人に、結は思わず目の前の視界がボヤけたように感じた。

「それって、中に収納してる服とか、出さないままでよね？」

「うん」

「ねえ。ここ。ここ見て」

聖人の笑顔を打ち消すように、結はピシッと眼下を指差して言った。

「フローリングに傷、傷ついてるよね。見える？ 見えるよね」

「えっ、どこが？ 傷なんてどこにもない？」

「あるでしょ。こことか、こことか」

聖人は、棒線のようないつもの目をさらに細くして、床の傷跡を視線でなぞった。

「あー、大丈夫じゃないこれくらい？ もう6年もここに住んでたんだし、俺」

「年数は関係ないでしょ。何年生活しても、丁寧に家具を扱ったり、掃除してた人ならこんな風になんないから」

「まあでもいいじゃん。敷金なんて、もともと返ってくるつもりでやってないんだし。それにどうせ俺の金だろ？」

そうだけど、とつぶやいて、結はため息をついた。「管理会社に引き渡すとき、私がつけてって思われたら癪じゃない」

「まったお前は、相変わらず自意識過剰だな。業者になに思われても、別にいいじゃん」

そう言って笑った後、結の反応がないのに聖人は気づいた。ゆっくりと首を動かし結の方向を見ると、案の定不機嫌そうな背中中で床の掃除をしている。

聖人は世の中のオトコの8割がそうであるように鈍い人間であったが、結との生活の中で、彼女の背中から不機嫌や怒りの感情を感じる能力だけは培われていた。ことわざには「腹を割って話す」というものがあるが、それは主に仲間や友人に対して使われる言葉で、近すぎる相手で大事なものはむしろ「背中を知る」なのだ。

「ごめん結、今のは言い過ぎた」

「……」

「ねえ、お願いだから最後くらいいい雰囲気が終わろうよ。仲良く、とは言わないけど、もう少しマシな感じで」

聖人が語りかけるが、その背中ではピクリとも動かない。ただ、規則正しく、アルコールを染み込ませたティッシュを持つ手が、前後に動くだけだった。

「まあ、今の俺が何言っても意味ねえだろうけど……」

結の沈黙に耐えかねたのか、聖人はゴミで半端に膨らんだゴミ袋を、手に取り始めた。すると、背中ですれを感じ取った結が、振り返らずに言う。

「もう出てくの？」

「違う、ゴミ捨てに行くだけ」

「まだそんな量たまってなくない？ 人がこうして拭き掃除してるのに？」

「玄関通れなくなる前に一旦捨てに行くだけだろ？ しかも、今日は結構手伝ってるじゃん……あのさあ、結」聖人は至極困った顔をして言った。

「いても怒るし、いなくても怒る。一体、どうすりゃいいんだよ」

そう言うと、聖人はゴミ袋を持って部屋を出て行った。ドアが閉まる音と同時に、結の胸の中にはやるせない気持ちが広がって、喉を通過して口を塞いだ。どうすればいいかなんて、私にわかるわけじゃないじゃん。ああ、なんでこの期に及んでこんなことで言い合いしてんだろ。どっちにもメリットのない、子供じみた口喧嘩。

聖人が1DKのこの部屋に置いていった気まずさを消すように、結はベッドで隠れていた壁紙の汚れを雑巾で拭き始めた。

交際3年以上のアラサーカップルが別れを解消するのは、当然ながらそれなりの覚悟が要求される。職場の人や友人たちに別れたことを告げ、望んでもいない「慰め会」に参加し、

もし新しい恋人を望むのなら、また出会うところからやり直す必要がある。知り合っただけで声をかけて仲良くなってお互いの価値観を確認しあって、でもどうなるかはわからず、独身の人生すら考え始める。人生は今や90年とも100年とも言われているのに、たった30歳やそこらで生涯の伴侶を決めろだなんて、この世はとにかく焦りんぼうだ。ああ、そんな風に考えると別れるのも腰が重い。交際数日で後腐れなく破局できた、中学生のあの頃が懐かしい……ベクトルは違うが、ある意味結婚するのと同じくらいの覚悟が必要なのが、この世代の恋人たちの別れだ。

冬の足音が聞こえ始めた秋に、結はこの街に始めてやって来た。ふたりが交際を始めてから半年のことである。それまで、結は学生時代を過ごした中央線の街にそのまま住んでおり、同じ都内ながらも田園都市線沿いにある聖人の家に行くのには1時間程度かかった。「男の一人暮らしって、こんなに酷いんだ……」

初めて聖人の部屋に入ったとき、結はそう思った。水垢がこれでもかとばかりにこびりついた流し台に、野菜炒めになれずこぼれ落ちたもやしや真っ黒の炭のような状態になって残っているガス台。キッチン奥の部屋も汚く、積み上げられた衣服は洗濯済みのものとそうでないものが混ざって積み上げられた悲劇的な状態で、ほんのりとカビのニオイが漂っている。結は以前から、聖人の仕事はかなり忙しい(その分、稼ぎもそこそこ良い)とは聞いていたが、すぐに自分の予想が甘かったことを悟った。

「ごめん、これでも掃除したんだけど……」と、聖人が叱られた子犬のような表情で、申し訳なさそうに肩をすくめた。

だが、そんなひどい有様は、結の綺麗好きの血を騒がせた。自ら掃除を買って出ると、結はせっせと水回りやトイレ、洗濯などを順番に片付けていった。「手伝おうか？」と言う聖人を制止して、自分が満足いくまで一心不乱に磨き続ける。

掃除とは不思議なものだ。部屋が綺麗になって明るくなると、そこに住む人の表情まで明るくなっていく。気持ちが明るくなるだけではない。窓から注ぎ込む光が、ピカピカの床や白い壁を反射して、住む人の顔を正しく照らすのだ。軽い気持ちで始めた掃除は、気付けば数時間に及んだ。

「でも、今思うとあれがいけなかったんだよな……」

聖人のいない部屋で、結はひとりつぶやいた。同棲生活の難しさはさまざまだが、現代カップルが一番揉めやすいポイントは「家事分担」だろう。結・聖人もそうだった。

まず、共働きとは言え、派遣社員の結と大手IT企業で営業マンをしている聖人には、2倍近い給与の開きがあった。おまけに、聖人は朝から晩まで仕事尽くめ。結果、ある意味自然と家事のほとんどを結がこなすことになっていった。

それとなく、何度か「手伝ってほしい」という趣旨のことを伝えたこともあったが、家賃を全額負担してくれている聖人には、強く言うことができなかった。

「結が仕事から帰ると、聖人がなにもしないで夕飯を待っている」「結が風邪を引いたとき、体調の心配はそこそこに自分の食事を心配する」……そんなことを繰り返した結果、家事負

担における不満を発端に、部屋の中の空気は少しずつ、少しずつ荒んでいった。

部屋の掃除があらかた終わると、ふたりは電化製品の中を掃除し始めた。洗濯機に電子レンジに冷蔵庫などなど……。洗濯機と冷蔵庫はもともと聖人が持っていたもので、電子レンジは結は持ち込んだものである。話し合いの末、それぞれの所有権はもともと持っていたほうに渡ることになっていた。

家電も、持ち主と同じようにお別れするのか。冷蔵庫と電子レンジ、もし付き合ったら申し訳ないな。そんな風に結がぼんやり思っていると、聖人の声が耳に届いた。

「なあ、一応聞いてくけど、エアコンってどうする？」

顔を上げて、結ははてどうすべきかと考えた。このエアコンは、同棲開始後に手に入れたものだ。もともとあったエアコンが故障したため、聖人が職場の同僚から譲り受けたのだ。

「でも、エアコンって自分たちで洗えるの？ 業者に頼むものじゃない？」

「まあそうだけど。でもエアコン、買ってから一回も掃除してないし」

そう言われると、たしかにそうだ。結は綺麗好きな性格を発揮し、今まで水回りや床掃除、トイレ掃除などすべてにおいて徹底してやってきたが、「エアコン掃除」というのは考えたことがなかった。

エアコンは、夏は湿気を外に出して、冬は温風を注ぎ込む。当然、空気中の汚れはすべてその中を通過しているだろう。例えるなら、一度も風呂に入っていない、年中無休の中年工事作業員のようなものだ。そして、私たちはその吐息を、体中で受けている……。

「ちょっとそこどいて！」

「えっ、っておい」

居ても立ってもいられなくなった結は、聖人を押しのけてエアコンの真下にイスを置き、その上に登った。しかし、中を覗こうとしても、小柄な体型ゆえ目線が届かない。

「届かない……も少し高いイスってないっけ？」

「ない」

「だよね。困ったな」

「じゃあ、もう諦めて送っちゃおう？」

「絶対ダメ！」

聖人の持ち前のいい加減さを、結は間髪入れずに拒否した。イスに乗っても、自分とさほど身長が変わらない結の肩をポンポンと叩き、聖人は言った。

「俺、やるよ。掃除」

「え、できんの？ 絶対壁とか汚すでしょ」と結は思わず聞き返した。

「大丈夫だって。それに、もう日数もないんだし。どっちの家に送るとしても、綺麗にしておいたほうがいいだろ」と聖人は言った。その言葉に、結は渋々うなずいた。

「この下のところにネジあるわ。外せそう」

「オッケー。壊さないように、慎重にね」と、イスに登ってエアコンと対峙する聖人に結が言った。

「わかってるって。あ、なんか硬いな」

「ちょっと、そんなに無理やり引っ張らないでって！」

思わず結が声を荒らげるが、幸いにもカバーはうまくとれた。

聖人があらわれた吹き出し口を見てみると、そこは目を覆いたくなるような惨状だった。黒々とした汚れが一面に広がり、水垢のようなものが四方八方にべったりこびりついている。吹出口だけではない。その奥にある、風向きを変える役割のルーバーや、さらに奥にある黒いファンにも汚れがたくさん付いていた。顔を近づけると、酸っぱいニオイが鼻を刺激した。

「ううえ、くっせ〜」

思わず悲鳴にも似た声が漏れた聖人に、不安げな様子の結が、目をこらして中を見て驚く。

「え、そことかあそことか……全部カビ？」

もともと丸い目をさらに丸くした結に、聖人は静かに頷く。

「ここを通った空気を、ウチらは直に浴びてたってことなの？」

「そう。毎晩、カビと汚れまみれの空気を吸い込んでたんじゃん俺ら」

「……ウチ、なんか急に呼吸器のあたりがイガイガしてきた」

「それはさすがに気のせいだろ」

喉をさすり始める結を横目に、聖人が続ける。

「じゃあ、始めるか」

そう言うと、聖人はオレンジクリーナーという洗浄液を手取る。それを見て、すかさず結が口を突っ込む。

「始めるって、もう？ 壁とかそのままでけど？」

「掃除するのはエアコンの中だろ？」

「バカ！ 壁とかプラグ部分をちゃんと保護しないと、汚れちゃうでしょ！」

大きな声を出す結に、聖人は顔をしかめながらわかったと述べる。

「最初にゴミ袋でちゃんと保護するから。汚れたり、感電したりしないように」

「当たり前でしょ。お願いだから、ちゃんとしてね最後くらい。あと、マスクと手袋忘れないで」

結の小言を聞きながら、聖人はゴム手袋をはめてマスクをつけた。言われたとおりに、電気プラグや周囲の壁を汚さないよう、大きなゴミ袋を養生テープで貼っていく。後で洗浄液がこぼれても心配ないよう、ゴミ袋のひとつは口を広げて、下に設置した。

その後、オレンジクリーナーをルーバーやファンに吹きかけ、細いブラシでゴシゴシと洗っていく。吹き出し口が水平なため、思ったほど液はこぼれてこないが、それでも少し作業するとエアコンの中に黒い水溜りができるほどだ。カビ特有の酸っぱいニオイが、柑橘系の酸っぱいニオイと混ざり合い、むわっとマスクの向こう側から押し寄せてくる。

数分間、聖人の作業を見守って(監視して)いた結だったが、やっとなんか問題ないと判断したのか、途中でエアフィルターを持って風呂場へと消えて行った。

その後も、聖人の作業は続いた。吐き出された黒い液体を注意深く、ティッシュで拭き取っていくと、ティッシュの量はどんどん増え、小さなゴミ袋は瞬く間にいっぱいになった。

オレンジクリーナーで目に見える汚れを取り終わると、聖人は霧吹きで水を吹きかけていった。こうすることで、エアコン内部から洗浄液を完全に取ってしまう。結は見る側に徹することを決めたのか、少し離れたところにぺたんと腰を降ろしている。やがて、聖人のことを見上げながら言った。

「意外といい感じじゃん」

「慣れると、俺もこれくらいはできるんだよ」

「褒めるとすぐ真に受ける」

「前向きな性格なんで」

聖人の言葉に、結は表情をゆるめる。やがて、ポツリとつぶやいた。

「いつも、これくらい家事手伝ってくれてたら良かったのになあ」

「してたじゃん」

「どこが」

吐き捨てるように、結が言う。

「どこがって、洗濯物取り込むとか」

対抗するように聖人が言うと、負けじと結も言い返す。

「取り込んでも畳んだことないじゃん。洗濯機にも入れないで、靴下すぐ脱いだままにするし」

「あとはゴミ捨てとか」

「ゴミ捨てなんか、1点」

「1点？ ん？」

掃除の手を止めて、聖人が聞く。

「家事はポイント制なの。皿洗い、料理、風呂掃除、トイレ掃除、ゴミ捨て、全部違う」

「え、それってマジな話？」

驚いた顔を見せる聖人に、呆れた様子で結が告げる。

「マジ。なんで別れる前に気を遣うの」

「じゃ、皿洗いは？ 何点？」

「2点」

「料理は？」

「1〜3。忙しい朝とか、手の込んだ料理は3点。惣菜をスーパーで買ってくるだけなら1点」

「言ってることはなんつか合理的だけど…でも、そんな細かい計算、してられるわけないだろ」

結の言葉に、納得できないという表情を見せ、聖人がつぶやく。

「もちろん、完璧に計算なんてできないよ。でも、私の言いたいのは、世の男は自分で思ってるほど家事してないってこと。『自称 3 割やっています』でも、ポイントに換算したらせいぜい 1 割なの」

両眉をそっと持ち上げ、幼い子に言い聞かせるような表情で結は言う。

「家事ってね、家の事って書くの。どれだけ会社で偉かろうが、頑張ってるお金の稼いでいようが、家の事しない人間には家にいる資格なんかないの」

なにか言いたそうな顔をして、風船がしぼむように聖人は言葉を飲み込んだ。それを見て、

結が口を開く。

「ほら、手止まってるよ。掃除の」

そう言われ、聖人は黙ってエアコン洗浄スプレーをフィン部分に吹きかけ始めた。ブラシでゴシゴシできない部分のカビを殺菌し、ニオイも少なくしてくれるらしい。やがて、吹きかけられて積もった泡が小さな音を立てて、ゆっくり、ゆっくりと、少しずつ弾けて消えていった。

「私たち、なんでこうなっちゃったんだろうね」

ポツリと、壁にもたれた結の口から本音がこぼれ、向かい側の壁にもたれて座っている聖人の耳に届いた。音を立てず、洗浄スプレーの泡はエアコンの奥へと染み込んでいく。

「なんでだろうなあ」

「お互い、それなりにいい大人なのにね」

結の言葉に、聖人はまったくどうなずいた。立てた両膝にそれぞれの手を置いているせいで、体勢までもがお手上げになっていた。

「逆にさ、どうすれば上手くいったと思う？」 結が聖人に尋ねた。「別に、やり直すとかそういうのじゃなく、ほらお互いもうアラサーだし、今後の恋愛に活かすって意味で…」

「わかってる。大丈夫」

聖人が結の言葉を制止して、続ける。

「タイムマシンなんかはないけど、仮定の話ね」

「家庭が築けたかもしれない、仮定の話」

「結はなにが原因だと思う？」

数秒考えた後、結が口を開く。

「まず、やっぱりお互いに好きって言わなくなったのが早すぎたことじゃない？」

「そこ？ もっと現実的なこと言うのかと思った。家事分担とか言う系女子として」

面食らった顔で聖人が尋ねると、結はゆっくり頷いた。

「そりゃ、そういうのももちろんあるよ。でも、一緒に暮らしていく上では、好きで居続ける努力ってやっぱり大事」

聖人が大きく頷いた。晩御飯のニオイを含んだ夕方の風が、ゆっくりとふたりの間をすり抜けていく。

「聖人は？ どうしとけば良かったと思う？」

「ん〜」 聖人は少し考えた後、口を開いた。「やっぱり、こうやってきちんと話す機会を作っておくべきだったかなって。俺、知っての通りテキトーな性格だし、結は結ですぐ頭に血がのぼるし」

「なに、まだケンカ売ってんの？」 作り笑いならぬ、作り怒りの表情を見せる結。

「違うよ、違う」と聖人は首を振った。「女子はみんな気分にムラがあるしさ」

「PMS とかね、あるもんね。そういや、初めて聖人に PMS のこと話したら『プクツとしてムスツとしてスカツとすること？』って言われたよね」

「え、そんなん言ったっけ？」

とぼけた顔をする聖人に、結は言ったよと笑った。「とりあえずフザけるっていう聖人の性

格、知らなかったから。あのときは、マジでぶん殴ってやろうかなって思った」

聖人は苦々しげに頭をかき、そしてつぶやいた。

「あとは、もう少し家事したら良かったなって」

「え、それってほんと？ やっとわかったの？」

「うん。さっき、結に『家事ってのは家の事って書く』って言われて、改めて感じたというか。俺、なんだかんだ言って今の時代も『男は仕事』って本気で思ってたから……」

「もう少しはやく、わかってくれてたらよかったのに」

結のつぶやきに、聖人が口を開く。

「でもさ、ひとつ言いたいんだけど……結も、直したほうがいいところあるとは思う」

「えっ、どういうこと？」 結が、思わず顔をあげて尋ねる。

「一緒に住み始めた頃さ、俺が食器洗ってみようとしたことあったの覚えてる？」

「あったね。私のシフトが夜で、帰りが遅かった日」

「そのとき、結がなんて言ったか覚えてる？」

結が首を横に振ると、聖人が視線を落とし、ワックスでピカピカになった床を触りながら言った。

「“なんでこんな雑な洗い方するの”“こことか、まだぬめり取れてないじゃん”って」

驚き、聖人のことを見る結。規則正しく動く彼の右手の人差し指が、キュッキュッと音を立て、静寂の中で響いた。

「いや、もちろん普段任せっぱなしだから、やったところで偉そうに言えるもんじゃないってわかってたけど。でも、正直褒めてくれるんじゃないかとか、結喜んだ顔するんじゃないかなって思ってたから、なんかショックで」

結は記憶の奥深くを探したが、残念ながらその釣り糸にはなにも引っかからない。

「皿洗いだけじゃなくて、その後床を拭いてみたときとか、水回りを洗ってみたときとか、『四隅がちゃんとできてない』『もともと綺麗だったところが汚くなってる』って言われたり」

「……聖人が家事をしなくなったのは、私が悪いってこと？」

結の問いかけに、聖人は焦った顔で「そうじゃない」と言った。

「責めてるとかそういうのじゃないんだ。ただ、俺たちは性格も育ち方も考え方も全然違うじゃん？なのに、最初から結の思う完璧を求められても、俺ができなかったのも無理もないかなって。ほら、俺って大雑把な性格じゃん？ エアコンの掃除するときに、壁のことなんか全然目に入らないくらいは」

聖人の言葉が、結の心をぐさっと射抜いた。もっともだ、彼の言うことは。たしかに、私たちはたまたま知り合って縁あって付き合っ一緒に住むようになっただけの、ただの他人だ。性別も趣味も、日曜日の過ごし方も違う。比較的一致している食の好みも違うし、好きな音楽ジャンルも違う。

「なのに、そういうのを言わなかった俺も悪かったなって」

そして、聖人はゆっくりと、噛みしめるように言った。

「結だけじゃなく、お互いに本当の気持ちを言えてなかったのかもな」

その言葉に、結の胸の奥からこれまでせき止めていた感情が溢れた。

「ねえ、なんでそんなに真剣な顔してんの？ 今まで、一度も見たことなかったのに。告白だって、うやむやにして、済ませたくせに」

「ごめん」 聖人は申し訳なさそうに笑ってから、泣きそうな顔になって言った。

「結、ひとつ聞いてもいい？ なんで、俺を選んだのかな？ こんな、手のかかる子供みたいなのを」

見慣れた、鈍感な横顔を見て、結は思い出した。この顔つきが、私はたまたま好きだったんだと。そして、結は聖人に言った。

「女ってね、わかるの。この人、好きになれそうだなってのが直感で。でも、幸せになれるかまではわからないの。それは……」

そこまで言うと、結は続きの言葉を飲み込んだ。「好きになるのはひとりでできるけど、幸せになれるかはふたり次第だから」という言葉を。

気づけば、ベランダに干してあったフィルターもすっかり乾いていた。フィルターをはめ、カバーをはめると、エアコンからはもう酸っぱいニオイはしなくなっていた。電源をつけると、優しい風が部屋に吹きはじめる。

「気持ちいいね。空気が明らかに昨日までと違う」

「うん。なんていうか、すっげえ清らかな感じ」

しみじみとした表情で、結がつぶやいた。

「掃除してないと、部屋の空気が淀んで、ふたりの間の空気まで淀むんだね。ちゃんとやってるつもりだったのに、見えてないところあった」

「仕方ないだろ。エアコンなんてそんな掃除するもんじゃないし」

「だよ。この身長だと、しようと思ってもできないし」

その言葉に、聖人がクスリと笑った。そして、優しく口を開いた。

「なあ結、俺たちやっぱりやり直さない？」

「えっ……」

驚きのあまり言葉を失う結に、聖人が続ける。

「これからは、お互いにちゃんと本当の気持ちを伝えあってさ。あと俺、仕事だけじゃなく、できるだけ家事とか頑張るから。ほら、とりあえずエアコン掃除はできるじゃん？」

優しく微笑む聖人に、結はゆっくりと微笑み、そしてうなずいた。エアコンの掃除なんて、せいぜい年に一回すれば十分だろう。でも、いいんだ。始まりはそれくらいでも。